北条中学校区

南条城

南条、佐橋神社のある丘陵が南条城跡だと伝えられている。南条の旧家大家さんがこの丘陵に分家を出して家号「城」と呼んでいる。佐橋神社はもと神明社だった。社の裏にある大杉の下に、天和の検地に用いた用具が埋められてあると言伝えられている。

南条城は宝治合戦で三浦に味方して亡びた相模毛利の一族の内、京都へ出向いて宝治の乱に関係しなかった経光という武士が落ちのびて来て住んだ居城である。越後毛利も西国毛利もそのわかされである。経光が毛利の祖であり、南条館がその宗家だと言われている。

このころはまだ戦国時代に入らず、山城の必要もないので南条城は平城として、典形的の要地だと言われている。

たかてらごうり

南条の南城塾跡南側の沢を奥深く入って、八石の中腹あたりと思われる処に、「たかてらごうり」と呼ぶ平地がある。この地についてだれも語るものはないが、小島の高照権現は極楽寺開山の宥秀上人が武士だった時の守り本尊だという。その上人は善根の不動滝で修業した上、当時無住の小島の寺に入ったと言われるので、小島へ隠れるまではこの「たかてらごうり」に高照権現を祀っていたのではなかろうか。

刀研ぎ場

上南条、佐橋神社のふもとに「りょうじば」という家があり、その裏に刀研ぎ場、または、血洗い池と呼ぶ一坪ほどの荒地が村の共有地となって草藪になっている。ふもと一帯の山は仁左ェ門の所有で　当主常司氏が若いころ、その山の塚三つ掘ったところ、いずれも首が出た。他に二つあるがこれも首が出るばかりだろうと掘って見ないという。

佐橋神社の隣に妙姫庵という尼堂がある。その尼堂を建てる時、方々から骨が出たので、それをまとめてほうむったという供養塔もある。

佐橋神社のある台地は、越後毛利発祥の地、即ち由緒ある居城趾のはずである。この首塚や、供養塔の骨などは、後の世のものだろうか。

大城坊塚

上南条、おおやさんは広い屋敷であるが、脇にある田の西側に老杉の並木があって、ここも昔は屋敷だったことが一目にわかる。その昔屋敷だった田と畑は庄屋をしていた惣兵ェどんが住んでいた跡である。その畑の片隅に大きな石が建ててあり、「大城坊塚」と刻まれている。庄屋の惣兵ェどんに、しばらくとうりゅうしていた旅の坊さんが死んだので葬った塚だといわれている。

天皇崎

南条、追田の山はなの藤田家を「天皇崎」と呼んでいる。そこの東に長者屋敷という地名の田甫がある。そこに住んでいた長者が、この地方では天皇さんのように偉く思われた。それでその鼻先にある家だから、天皇崎と呼んだらしい。そこから赤尾へ越す小道が、大昔の街道らしい。途中かめのくらの池からその道を別当坂と呼んでいるのは、昔、その池の上に観音堂があったと言伝えられているので、観音堂の住職の通る坂だからであったろうと思われる。観音堂のあったという下の田に「じょうきん塚」がある。何の塚だやら。

八石山の朱樽

昔から八石のどこかに朱樽が埋めてあると言われている。北条の諏訪の木に、漆千杯、朱千杯、埋められているともいう。

また、南条の小番城という処に朱が埋めてあるともいう。

八石山麓のある農家の馬が逃げて帰って来た時、片脚が血だらけだと思ったら、それは朱だった。朱瓶に脚を落したのだと言われている。

北条駅前、田中旅館で柏崎、長岡方面の道具屋が交換会を例会として月毎寄っていた。長岡商人が五升樽位の朱色の石を持って来た。これが朱の化石だったらしく、小国の難波さんの宝とされていた。これがどこから出たものか、当時の長岡の商人もどうしたか、その朱樽は東京の博物館にまで出されたが、今、どうなったかわからない。（大正十年ころの話）

南条の山本家

南条の山本家は、山本勘助の嫡流（ちゃくりゅう）だと世間では言うが私は知らないと当主誠治さんはいう。

山本さんの家に立派な阿弥陀さんがあった。在家で守り出来ないので正雲寺に納めた。昭和十一年ころ、天渓方丈時代に仏師にかけて塗り替えられたが背丈一米もある座像である。この仏さんの祭日は二十三日とされているが、現在のお婆さんも娘さんも二十三日の生れで何か因縁があるようである。

また、刀、檜羽、くつわなど明治二十年ころ刈羽神社へ寄進された。県道脇の道祖神も山本家のものである。また、南条火葬場のある小山はもと、山本さんの神明さんを祀ってあったところである。

この火葬場は北条村初代村長藍沢啓一さんの強硬な意見で作ったものだが、明治三十年ころ赤痢が流行して大勢の人が死んだ。そこで占って見てもらったら、火葬場の煙が神明さんにかかるためだと言われ、神明さんは刈羽神社へ移された。

大西の道祖神

下南条の大西さんは由緒ある家である。昔、そこのおいねという

娘さんが他へ縁づいたが縁がなくて家へ戻った。そして旅に出て大阪のこうの池で楽に暮していた。ある年南条の者が上方詣りに行って大阪でおいねさんに遇った。

おいねさんはなつかしく思って、いろいろ話を聞き、越後へ帰りたいようだが帰れないから、故郷の妹にこれを渡して下さいと包物をたのんだ。その人が帰ってその話をし、包物を渡した。沢山のお金が入っていた。妹も村の大工さんに縁づいて楽な暮しをしていたし、姉さんの苦労したお金を無駄には使えないと両親の瞑福を祈って建てたのが、今下南条の堂の裏側の県道端にある道祖神である。

この道祖神は非常にご利益があらたかで、特に首から上の病気は医者にかかるより良いと言われ、信心者が多い。津右ェ門どんのお爺さんは耳の痛む時などお詣りをしているが、きくので医者にかかったことがないといわれ、祠の屋根などいたむと寄進で立派に修理している。

刈羽神社の天神さん

南条の刈羽神社はもと、天満宮で天神さんが本尊である。村社の格式だったこのお宮さんは当時の産土神（うぶすながみ）である。ご神鏡に柏崎町諏訪の氏子の名がある。

この奥殿に　天神さんの頭だけある。天神さんの胴は中通村吉井の天神宮にあると伝えられている。

白蛇の次郎吉

昔、大洪水で鯖石川がはんらんして、長鳥川の合流するあたりの堤防がくずれ、流されて大きな被害を受けた。この堤防を作り直すために、関係村方から大勢の人夫が集って工事をしていた。その人夫の中でとりわけ立派な次郎吉という青年がいた。多くの若い女どもはこの次郎吉の男振りにほれ込んで夢中だった。他の男達は次郎吉の人気を皆ねたんでいた。

ある日　次郎吉も土俵運びの行列に加わり、威勢よく足場板を渡っていたところ、だれかに後ろを突かれて川に落ちた。そして落ちた次郎吉は、その深みから浮かび上らないでしまった。

普請が出来上ってからもそこは、青々として深い淵となっていた。ある日、水遊びをしていた青年が、亀をとるために水にもぐったところ、つやつやとした大蛇が底に見えた。

あの立派な男だった次郎吉は大蛇の精だったのだと言伝えられている。

（注）　この話は田尻、安田方面にもある。「次郎が淵」の名のもとで。

駒返し橋と駒越え

北条城と八石の善根城は同じ毛利で親類だったが、善根の殿様、

太万之介が偉い人で勢力があったので、北条の殿様は何とかしてこれを亡ぼそうと考えた。そして自分の大切な娘を善根城の殿様の嫁にやった。善根城の殿様は盛大なお祝いをして仲良く暮した。しばらくたって北条の殿様は一戻りということで善根の殿様を招いた。善根の殿様は喜んでよばれてきた。

北条城ではさっそく汗を流して馬上の疲れをいやすようにと風呂をすすめた。善根の殿様はそれではと風呂に入ったところ外から戸を閉め切って蒸し殺しにしてしまった。家来達は驚いて善根城に知らせた。善根城の家老はさっそく家来を引き連れて北条城へ攻めて来た。南条と北条の境の太田川まで来た処、そこの橋は落されていた。一同引き返したところの橋も今でも駒返し橋と呼んでいる。

引き返した武士達は太田へ出て、赤尾へ越した峠を駒越えと呼んでいる。

善根の殿様を蒸し殺しにした風呂が地獄だったので、北条ではそれ以来地獄風呂を作らないと言伝えられている。

十三が滝（じうさがたき）

八石山の北側の断崖に、高い滝が落ちている。この滝のある沢は赤尾の奥で、八石山では一番深く、険阻（けんそ）の崖である。

昔、殿様が殺された善根城の侍十三人が、北条城へ仇打ちに入ったが、さんざんの目に合って逃げ出し、この沢へ逃げ込んだ。雨の降る真暗な夜中、八石山の南の端にある善根城へ帰ろうと無我夢中で崖によじ登ろうとした十三人の侍は、このけわしい滝のある崖からみな落ちて死んだ。

それから、この滝を十三が滝と呼ぶようになった。

佐藤ケ池の窓池

南条八石と赤尾八石との間に窓池という池がある。

昔、田尻の佐藤ケ池に、餅をついて臼、杵、もろとも投げ込んだところ、その杵が八石山の頂上のこの池に飛び出した。それで「佐藤ケ池の窓池」と呼んでいる。

神の鞍

赤尾の沢を入って八石尾根に近いあたりに、「亀の倉」と呼ぶ所がある。刈羽平野、柏崎、佐渡まで一望できる所で、今は休耕されているが広い田になっている。塚もあって昔の由緒を物語っているようである。水無しという山の嶺下だが、用水をじょうずに引いてあるのか、休耕田には鯉も飼われている。

鹿島大明神の由緒書を見ると、今「かめくら」と呼んでいるが、昔、「神の鞍」と呼んで大明神の元屋敷だともいう。

また、もと普広寺の方丈さんは、普広寺もここにいて、日本海を見ながら漁船にいたずらするので下へ降ろされたのだと言ったと伝えられている。

赤尾の本陣山

赤尾、なかさんの裏山は、「問屋山」「なかの山」「市郎えんの山」と交互につづいて、頂きを本陣山と呼んでいる。海も刈羽平野も一望出来る所である。南の方に「神の鞍」、東の方に「城平」と呼ぶ所がある。赤尾人道の陣取った山だろうか。

そうどうがうら

赤尾の奥、十三滝の沢に入るあたりの上に「そうどうがうら」と呼ぶ大平がある。その尾根に古塚三本松があったが大正のころ、南条の牧口が買い、北条の万吉がきった。この大平の南側は南条の官公林である。そして八石堂平に続いている。この官公林の昔騒動があったので、その北裏の大平を「そうどうがうら」と呼ぶようになったものらしい。明治の官地整理のころも、その土地の地権争いが南条と赤尾で起きた。結局地権は南条へやり、その付近の水利権は赤尾で取った。この水を南条側に引かれると赤尾、北条の愛宕沖の田が干上ってしまうのである。それで水利権のことは赤尾と南条の区長が証拠文書を取りかわし、北条の佐藤さんも一通届けられてあるという。

そうどうがうらに入る手前に「くけがつぼ」、「ばくちば」「ばくちが峰」「かくれや」などの地名があるので、そこらあたりでもそうどうがあったものか。

また、「そうどうがうら」の脇に、骨山と呼ぶところもある。

白山神社の祭礼

本条、赤尾の白山さんの祭日は毎年四月二十三日である。

これは、平家が壇の浦で亡びた日で、平家の冥福を祈って行われるのだという。

壇の浦から逃れた一族は「さぬき」に隠れたが一派は北陸を経て六条院領地のこの地を求め、定着したもので「伊平」は伊勢平家から取った姓であるという。

稲葉の寺屋敷

赤尾の奥のはずれに、稲葉の寺屋敷というところがある。左側の小高い所で今は田になっている。最近ここを田に開墾する時、骨がたくさんでたので、上の雑木林の中に、無縁仏の塚を建てた。

昭和十年、寺沢恒三建之となっている。

その反対側の方をあらたやしきと呼んでいる。あらたは新田か、荒田か、この田のつきたあたりが駒越えの峠である。

赤尾の坂井家

昔、平沢の山上徳左エ門の家から徳右エ門という者が赤尾に来て住んだ。徳右エ門は米山検校の弟で、赤尾に米山検校の土地があったので、それを支配するために分家して来たのだった。

村の人達は憎んで再三放火した。それで時の権門、両田尻の大肝煎　酒井武右エ門を頼み、坂井姓に改めて安住するようになった。

徳右エ門は後に江戸に出て、海照山僧林禅師の弟子となった。諸国を回歴して修業した、了円沙弥は徳右エ門である。

赤尾に来た徳右エ門は平沢の親の家が隠居というので　そのまま赤尾の住居も隠居と呼ばれた。

了円は修業して、納経帳七冊がある。

現に隠居には永代家宝として、了円の小手、きゃはん、墨衣、膳椀杖の頭の尺鐘、分家亀三郎家には、鏡、了円使用の南天の杖が残されている。

毛利屋敷

本条鹿島に「モウリヤシキ」と呼んでいる処がある。北条城城主毛利さんの屋敷は文献にはっきりしないといわれているが、この毛利屋敷が毛利さんの屋敷跡だと言われている。

南条にいた毛利さんが北条へ来て、城山を造るまでここを館とされたらしい。

鹿島は昔から部落の名を「モリ」と呼んだり、「屋敷田」「屋敷田七十刈」「屋敷付」「屋敷そへ」等の地名が伝わっているし、長鳥川にかけてある橋を外城橋と呼んで、東の武家屋敷と西の北条町方を結んでいる。

御島石部、諏訪両社がある鹿島部落は、北条郷草創の土地であるから、初代時元もここに館を構えたのかも知れないが、はっきりとわかっていない。

神楽舞

神楽舞は近郷近在にあるけれども、北条が本元らしい。北条でも鹿島と南条で古くから舞われ、現在では毎年春祭に舞われている。その本家本元は鹿島の御島石部神社の神楽舞だと言われている。

鹿島でもいつの時代からかわからないが、古くから伝わっているもので、今でも五月八日の祭典に奉納されている。

以前は舞の数は二十八あったと伝えられているが現在二十位になり、普通十二しか舞われていない。

一、宮清　二、岩戸　三、稲田　四、幣束　五、諸葉　六、鈿女　七、神遊　八、羽返し　九、鏡造り　十、稚児　十一、蛭子　十二、小奈曾利　十三、大奈曾利　十四、大黒　十五、玉神　十六、龍田　十七、曲玉　十八、造杵　十九、野幸　二十、太平楽

以上二十の神楽は、問答、謡の入っているもの四つ、残りの舞はだんまりで、舞殿のお簾内の囃子方（はやしかた）のはやしにつれ

て舞うものである。

今熊

本条の今熊は元、下村といった。現在今熊に「ほんえんさん」という家があるが、明治中程まで清照院という真言宗の寺だった。元禄三年に京都三宝院御門跡の随従が寺を建立され、今熊山清照院と本山から山院号を下賜された。それからこの部落を今熊と呼ぶようになった。

清照院は火災にあって仏像、仏閣が皆焼けてから再興出来なくて農家となったが部落の名が今熊と呼ばれ、家の名が「ほんえんさん」と呼ばれて今も残っているわけである。

熊野神社の樫の木

本条今熊の氏神さんは熊野社であるが、今熊には諏訪社、神明社、大神宮、熊野社の四社があって、この熊野社は笠原五右ェ門家の個人宮だった。明治の末に四社合社して熊野社が字宮となった。

熊野社の境内に周囲二、五米もまわる樫の木があるが、これは五右ェ門が上方詣りをして、紀伊の熊野権現から記念に持って来て植えたものと伝えられている三本のうちの一本で、五右ェ門家の奥庭に茂っている大樫もその時のものとのことである。

法恩寺跡

本条今熊のはずれ、平井との境のあたりにだんだん小田の沢があるが、法恩寺跡と呼んでいる。何宗でいつころまでお寺があったのか、土地の持主仁右ェ門どんも知らないという。

畑になっているところから土器も出るし、良い清水が湧き出ている。盆石に使う夏川石もこの沢にある。

しかし、法恩寺と書かれた額が、今熊の薬師堂に今も残っている。

北条の城山

北条の城山は見晴しのよい標高百四十米の高地である。中世の山城では典型的だという。

この城を中心に築かれた善根、安田、上条、細越、深沢、鳥谷、赤田、桝形などの城跡が指呼の間に見える。

いつころ出来て、いつころ亡びたか村人は知らないけれども、「城山」と呼んで親しまれている。

大正の初めころまではたこ揚げ場所だった。法雲寺の義正坊など一番大きなたこを揚げた。そのころの頂上は、ぐみの藪が点々としていて、きりぎりすをとる場所でもあった。

秋田の石油業で成功した定蔵さんが公園を計画して、桜を植えた。その時、地元の権力者景範太夫さんは松を主張して、家近城山の方

には松が植えられた。それはたこ揚げが絶えた大正の初めころだった。

お城のあたりには、

「駒落し」「駒つなぎ場」「おはい」「かいせんどう」などの地名と沢山の濠形が残っている。

城の地形は昭和四十五年十一月十五日柿崎高校歴史クラブが研究発表。歴史は北条町史で関久さんが詳しく記述している。

北条の十五夜祭

北条の十五夜祭は十日市部落にある上、下両八幡社の祭礼で昔から刈羽郡内切っての大祭として有名であった。

神社創建は千年の昔にさかのぼるとも伝えられているが、祭礼の歴史は約四百年といわれている。この祭礼では燈籠献納と煙火奉納が特色のある行事とされ、それぞれ起りについて伝承がある。

即ち燈籠祭はかって深沢城主であった村山家の先祖が、八幡宮の守り神であった鳩を狩りの際誤ってうちおとしたことから、家や村に災難が続き、そのおわびに信心祈願のため燈籠奉献するようになったといわれる。また人形を作って献納するようになったのは、八幡社の裏山に天狗が住んでいて、毎年仲秋満月の夜、村の娘を一人ずつさらって生き血を吸う凶事が続いたので、八幡宮にうかがいを立てたところ人形を作って身代りに献上するようとのお告げがありそれ以来続いているという。

なお、この祭りを「ゴザ祭り」と別称されているが、このいわれについて、いろいろの説がある。①小千谷方面から泊りがけで祭り見物に来る用心のため、②雨降り季節で雨が降りやすいが、雨に降られても平気、雨具として、③男女野合の風習がありその用意のためだと。……

北条のとうろう祭り

北条村に、正八幡宮という村社がある。昔、北条の問屋の子が、八幡様のお使い鳩の卵を取って家に持ち帰った。

その夜、その子の首がまがって後向きになってしまった。驚いた両親は、家近の法印さんに行って、占ってもらった所、これは神罰だ。最愛の子供の事だから、身代りに人体を模造して、奉納せよと言った。

両親は、子供が鳩の卵をとったことを知って、その卵を旧巣にかえし、その上人形を造って之を神にささげた所、三日にして子供の首はもと通りになった。

それより、毎年いろいろの人形燈籠を奉納してお祭りする事となったという。

北条秋祭の拍子

北条の秋祭は有名な十五夜祭である。このお祭には賑やかな屋台拍子と、静かな祇園拍子が伝習されて来ている。

屋台拍子は、引きまわす屋台の上で、大太鼓と小太鼓を連打するする威勢の良い音と笛二丁が鳴り添うて秋の夜の情緒を深めているものながら、いつころ、だれが教えたか知る者はない。

祇園拍子は、八幡さんへ奉献される燈籠行事に従う拍子である。三味線二、笛二、鼓一、金鼓一の六人で奏でる拍子で、静かな、めんめんじょうじょうとした音律は美しく、また、大古のおごそかさえ加わり、村の人はこの音を聞いて初めて秋祭を知り、秋の夜を感ずるものである。この拍子は村の、村山源左ェ門という人が、今より二百年位前に京都に遊学した際、一人で三味線、笛、鼓を覚えて来て村の青年に教えたものといわれている。

堀の内町の祇園拍子も六人で同じ楽器を用いるというけれども、節は違うらしい。歌祭で各地の拍子を聞くけれども、北条秋祭のような拍子は聞いたことがない。

八石山と豆木の門

昔、八石山の麓に仲の良い夫婦が住んでいた。そして可愛い男の子が一人あった。男の子が幸福に育っているうちに、女親がふとした病気で死んだ。親子二人でしばらく仲良く暮していたが、父は人にすすめられて後妻をもらった。女親になった後家さんも良い人で先妻の子を大切に育てていたが、自分の子が出来てからは、先妻の子を憎むようになった。いろいろ難くせをつけていじめていたが、ある時二人の子どもに豆を植えさせた。

自分の子には良い豆を先妻の子には煎った豆を持たせた。幾日かたって裏山へ行ってみると、自分の子のまいた豆は立派な芽を出しているだろうし、先妻の子のまいた豆は何も芽を出さないだろうと思っていたら、先妻の子のまいた種が一本だけ芽を出してすくすく伸びていた。それがどんどん大きくなって、秋には大木になって豆が八石もなった。

それからその山を八石山と呼ぶようになった。

その豆の大木で造ったのが専称寺の門の柱だということで有名である。

また、その豆の木の枝が小国へとんで行って芽を出したのが沢山実って、大きな桶に三つもあったのでその村を三桶と呼んでいる。

矢ケ谷

専称寺といえば豆の木の門で有名な寺であるがその裏山に矢ケ谷という処がある。村の寺沢翁にその由来をたずねたところ、「この寺の裏山は北条丹後守長国公の旧城跡であるが、公は上杉霜台公逝去後、三郎景虎に属し景勝公に抵抗した。なかなか豪傑だったので景勝公もどうすることもできず　月日を通したある日、長国公は浴衣着のままで館城から北条城に帰ろうと供も連れず、単身乗馬で米山峠を通る時、景勝公の一味のやからが森の中から不意に弓を射た。矢は長国公の脇腹を射た。公はその矢を抜かんで苦痛を忍び帰城した。お城で家来に矢を抜かせて、城下の地に埋めさせた。しかしその傷の痛手にたえられなくて、二、三日して死んだ。矢を埋めた地だからその地を矢ケ谷と名づけた。」というのである。

荒神屋敷

北条、専称寺の境内を「荒神屋敷」という。北条城毛利丹後守が代々、城内に奉祀して、火防に留意したものといわれる三宝院大荒神を寄進され、堂内に勧請、お祀りしてあるからである。

三宝大荒神とは仏法僧の三宝を護持する三面六臂の鬼神で、また三宝衛護の荒神である。

三宝荒神は三面忿怒の相を現わし、六臂に、独鈷、矢、剣、鈴、弓、杖を持つ立像である。

そえで、専称寺は北条山三宝院専称寺という。

普広寺の観音さん（馬頭観音）

北条の善広寺に祀られてある馬頭観世音は、大正六年に江部忠作さんが寄進したものであるが、以前は家近の「あぶらや」に安置されていたものである。

今は家も絶えたが、あぶらやの主人福治さんは信心深い人だった。その先祖は常に観世音菩薩を念じていたところ、ある夜夢に、おごそかな雲の中から聖者が現われ、馬に乗って家に飛込んだので有難く拝んでいたところで夢が覚めた。翌朝身を清め燈明をあげて家族一同に話をし、不思議に思っていたところ、ある日、どこからか道者が来て宿を乞うた。心待ちしていた客を迎えたような気で宿を貸して、先ごろの夢の話をしたところ、その道者は、「馬来の観世音は、我、安置奉る馬頭観世音是れ也」と笈（おいばこ）より恭しく仏像を出し、「この地は観世音の霊地である。一宇を建立して安置されよ」と馬頭観世音ならびに二種の宝物を授け、いずれかへ立ち去った。岡田家では一宇を建てて祀ったところ、みたらせが川のように湧き出て、近郷近在から信者が集った。産婦、乳不足の者の参詣者に霊験あらたかだった。

しかし、あぶらや当主福治さんは東京へ移住することになった。そこで縁者の江部忠作さんが譲り受け、自分の家に安置していたが大悲の誓願を衆生に及ぼすために、発願有志と協力して、名刹普広寺に奉納したものである。

雷休権現

北条の殿様が、善根の殿様を招待して、地獄風呂で蒸し殺しにしてから、毎夜のように善根城のある八石山から、いなずまが起り、北条の空にきて暴れまわるので、殺された善根城の殿様の　おんりょうが、たたったのだろうと村中おののき合った。

村の人達は、普広寺の方丈さんにお願いした。方丈さんは大門の左側の小高いところにお宮を建ててお祀りし、おんりょうを封じ込んだ。それから、いなずまが暴れないようになった。

このお宮が雷休権現である。今は、その権現さんに村の八つの字の神さんが合祀されて、八柱神社となっている。

西方寺

西方寺は始め天台宗だった。その後、桑陸田専信が中興開基となって、遠洲桑畑に移り浄土真宗となった。その後、信洲芋井の里に移って井上という処に一寺を建て、全躰山井上寺と言った。その後また越後中頸城郡欲野に、そしてまた同郡田中村に、三島郡片貝村にと転々と移って慶長三年に北条に移って来た。

北条では加藤茂左エ門家でわらじを脱いで一宇建立した堂地を古屋敷と呼んでいる。それから七十年後現在地に一宇創立したが享保年間と安永六年に類焼し、現在の堂宇は寛政六年に再建したものである。

また大東亜戦争で供出した梵鍾には

元禄十四年　片貝村西方寺

と刻まれてあった。

憶念寺

憶念寺は昔、長鳥の竹の下にいたという。竹の下の三九郎の墓地に憶念寺の墓がある。長鳥にいた時　また北条へ移ってからもしばらく真言宗だった。西方寺が片貝から北条へ移って来て浄土真宗をひらくようになってから同宗となった。当時火災に合って独立出来なかったせいかもしれない。荒町の隠陵さんは憶念寺から分れてから六代目で、浄土真宗の本尊を持って分れたものである。深沢、程平の檀家をもらって寺役をしていたが二代は百姓になった。西方寺について、浄土真宗になってから現主秀信師で十二代目である。

じぶが墓

昔、北条へ六部が流れ着いた。笈（おいばこ）の仏はあらたかなので、これを「かじがいり」の奥に小さなお堂を建てて祀っていた。ところがその一家は北条におられなくなったか、仏堂を残したまま他へ移って行った。

お堂のあった上の山一帯を長徳院と呼んでいる。その山の頂点に時代の知れない古い墓がある。この墓は曹洞宗で郡内随一の普広寺に由緒ある墓とされている。村ではこれを「じぶが墓」と呼んでいる。

普広寺は神興院殿村山安芸寺の開基である。今の処に建つ前に「もとやしき」と呼んでいる処に建て、それを今の処に移したものである。「もとやしき」に招建する前は「かじがいり」の奥に置き去られた仏堂だったと言われる。

普広寺の開基の位牌に、神興院殿村山安芸守正勝と長徳院長朔との二開基名が列記されている。それで長徳院の「じぶが墓」は最初六部になって北条に流れて来た人の墓であろうと言われる。

その「じぶ」とは高橋治郎左エ門という武士だったと言われている。どうして他へ移ったかわからないが鵜川へ行ったと伝えられている。

紺屋九郎兵衛

紺屋九郎兵衛は北条八日町で「あめや」と呼ばれていた。もと武士で毛利さんの家臣だった。先祖は法華宗本覚寺を開基している。明治の末ごろまで紺屋をしていたが、どうして貧乏したか奉公人の中沢に店をゆずって、小作百姓となった。

そのころ紺屋の原料の藍の送りを見ると、西蒲原小池で出来た藍は、船で信濃川をさかのぼり、与板に出て、与板から陸路から出雲崎に運ばれ、そこから海路柏崎に陸揚げされて北条へ来たのだった。

紺屋の後を継いだ中沢家は大正の中頃まで土間に大きな藍瓶を構えて商売をしていた。

ちゆえんごろうの大黒さん

北条のごろう（ちゅうえごろう）の家に昔からあらたかな大黒さんがある。家が長鳥川のふちにあるので、ある年大水が上って家も水びたしになった。お椀の中におさまっている大黒さんは外へ流し出されたが、家のけらばを廻っていて他へ流れなかった。この大黒さんがあるので、ごろうの家はどんなに貧乏をしても食うに困るようなことはなかった。

この大黒さんは、専称寺の山門を造った左甚五郎の作である。左甚五郎は専称寺の門を造る時、ごろうの家を宿にしていた。女房代りの女もいたし、子どももあったので、村をはなれる時、女房や子どもの生活が出来るように、この大黒さんを刻んでくれたほかに、山門の秘密を教えていった。

いつか大風が吹くとこの山門は傾く、その時急所に栓がある。その栓を抜かんとどんなことをしても起きない。その時、村の人が困ったら栓を抜いて見せると門は起きる。そしたら別の栓穴にその栓を打ち込めば、こんどは絶対傾かぬ。と教えた。ある年の大風に門が傾いた。ごろうの子どもが教えられた通りにしたところ、その通りだったので村の人はその子どもを尊敬した。

その後山門を旧道から現在の所に移す時、どうしてもくずせないので、門のまま移したと伝えられている。

愛宕さん

愛宕さんは北条駅南前の松山の頂上にある神社で七月二十四日が祭礼である。この祭礼は大正の中ごろまで盛大だった。たんぼ道から真直ぐ頂上へ登る道と、赤尾口、南条口からも参詣人が続きわたった。そのころ珍しい氷店、桃店などがふもとにも頂上にも出て柏崎のエンマ市のようだった。

お祭の後の草相撲は近郷近在の田舎力士が集って来て、このかいわいの名物だった。どうしてこんな小さなお宮のお祭がこのように盛んだったかと縁起を聞いて見ると、もともと、このお宮は家近の五十嵐さんの個人宮で、昔先祖の大夫さんが夢を見て、夢頭に立った神様のお告げに「私は黒姫山の機織神だが、奥深い山中なので、

参詣者が少なくてさびしい。北条の山に迎えてくれないか。」とのことだった。五十嵐太夫さんは、「それでは」と自分の家の山に祀ったのがこの愛宕さんである。

そのことが言伝えられたので岡野町や頸城方面からも黒姫山の信者が参詣に寄って来るので、あのように賑わったものらしい。

しかし五十嵐さんも太夫さんをやめたし、相撲もなくなったので今では五十嵐さんの内輪の祭となった。それでも昔からの因縁で、まだ頸城方面からのお詣りが来るとのことである。

家近の道祖神

北条の家近と泉の境に、昔からあらたかな道祖神がある。昔は明しの絶えた日がなかった。耳、眼の悪い人がよく信心に通った。

ところが、この御本尊はなかなか粋な神さんで、縁結びもなさるので一層信心する者が多くなった。

小島のある家で、せがれが三十を過ぎたが嫁がない。そこで女親が人知れず願をかけて通った。ところがある夜、その母さんに夢知らせがあった。品の良い老人が夢枕に立って、「お前の家の嫁は、東の方の山の、山合の村にいる」とのお告げがあった。

いろいろ考えて見ると八石山の山陰の小村に菅沼という村がある。どうもそこらしいと思って行って見た。嫁さんになる年ころの娘のいる家を聞いて訪ねたところ、そこの家の母さんも同じ夢を見たもので、小島あたりに娘が嫁に行く家があるらしいと心待ちしていたところだったとのことで、縁談はすぐ決まったとのことである。

雷塚

八石山から鳴りひびいてきた大きな雷が大きな地ひびきをたてて落ちた。そこは泉のおもやのうらだった。行って見たら大きな石が落ちていた。八石山の分され石だと村の人は言い伝えて、泉の村でお祭をしてきた。泉村の立ち始まりから言伝えられているのだと亡くなった入沢幸孝さんが語っていた。

また、この石は幾年経っても苔が生えないとのことである。

大人（おおびと）さんの足跡

昔、巨人がいて富士山を一夜で造ったとか、名山に腰かけて、利根川で腕を洗ったとかいうほどの巨人が住んでいた。その背丈は青空にとどかんばかり　その腕力は怪力で、それはそれは言葉で言い表わせないほどの巨人であった。

ある時、その巨人が日本海の方から八石山方面へ抜ける途中、小島の大山と、うるし裏とに足を踏み入れたので、そこにくぼみができ、「大人（おおびと）さんの足跡」と呼ばれる池が出来た。

今、大山にある「大人さんの足跡」は二間（三、五m）と四間（七m）位の大きさで、日照りの時は水がかれて、くぼ地に草が生えているに過ぎない。うるし裏は、常に水をたたえている。水を満々とたたえると、ちょう度、巨人の左右の足跡のようなので、自然こ

の名が生まれたものらしい。

（注）大人さんの足跡は、小島のほかに、五分一、鷹の巣にもあるし、鷹の巣の隣村の高鳥にもある。

高照権現

いずこからか流れてきた武士が、当時無住だった小島の寺に落着いて出家した。そして極楽寺御開山宥秀上人となった。

武士だったころ、兜の守り本尊だった仏像があらたかなもので、高照権現として寺中に祀られている。上人が武士だった時の女房が七人の家来に守られて小島へ後を追って来た。しかし自分は既に出家した身だからと、寺の下に家を建て、元の女房を住まわせた。それが若月重左ェ門の先祖である。七人の家来たちも百姓、職人とそれぞれ稼業を持って小島に住みついた。それが小島の若月家一族だといわれている。

高照権現は非常に霊験あらたかで、北条城毛利丹後守が眼病を煩った時、この権現に祈念して平癒してから一層信心する者も多くなった。小島に「がんねのた」というのがあるが、それは丹後守が寺へ寄進した「願念の田」のことである。

極楽寺の稲荷さん

小島、極楽寺御開山宥秀上人は、境内の西、後山に堂を建てて稲荷さんを祀った。今「いなりどう」という山の草藪の中に小さな祠が建ててある。

八方口から弘法清水のある峠を越して来る道で、今は山道でしかないが、昔は弘法さんも　通られたほどの道だった。

その稲荷さんが非常に立派な御神体だったので、旅人が盗んでいった。ところが旅人は稲荷さんのたたりで他の悪事も露見して役人につかまった。下総、千葉辺にあった稲荷さんは、越後、小島の極楽寺さんのものとわかり、再び還ったものと伝えられている。

弘法清水

昔、中田、畔屋方面から北条へ来る道に小島大山の八方口を通って小島へ出るのが重要な往来だった。八方口は北条城の番城もあったところで、平井、畔屋、中田、中通、長鳥山潤、小島、北条と八方へ通ずる岐点である。

その八方口から小島極楽寺の後山に来る峠は、人通りの多い道で、弘法大師もここを通られたらしい。数㎞の間、人家の無い、しかも高い峠なので、弘法大師も難渋されて、この峰のあたりに清水があったら、旅人も村の人も助かることだろうと、杖をお突きになったところ、立派な清水が湧き出た。かなり高い峰のあたりだが、今でもこんこんと湧き出ている。旅人も村人も大変助かり、有難い「弘法清水」と呼んでいる。

深山神社のおまえん

山澗の深山神社に古いおまえんがある。おまえん、こまえんと言って一対あるはずなのに、この神社には片方しかない。

片方は赤尾の白山神社にあると言伝えられている。それは昔、山澗（やまだに）の深山神社と赤尾の白山神社と、このおまえん、こまえんのとりっこの争いをした。そこで一体ずつ分けて祀られてあるが、そのため昔から山　と赤尾は縁組が成立しないと言われている。

深沢城

深沢城城主は、北条の旧家村山さんの先祖村山安芸守の居城である。館は深山の松山さんの裏山一帯の雑木林になっている処だという。村山さんは今でも毎年一度お祭をしている。

かや藪の中に本丸、二の丸また、物見や番所のあともあるが村の人で知る人は少ない。

城への道は鹿島のお宮さんから、大場山の屋根伝いに登ったらしい。戊申戦争のころはまだ道があったものか官軍二人と会津武士三人がこの深沢城あたりで出合って、切り合をしたのを藪の中で見ていたと松山さんの亡くなったお爺さんが語っていた。

北条には村山間屋さんと、権八どんという二派の村山がある。先祖は一つだったか墓所も隣り合っている。また間屋さんの先祖村山安芸守の館一帯の雑木山あたりは国光鍛治がいたとのことで、地名を国光と呼び、大場山から深沢城へ登る中途にある大きな雑木山は権八どんのもので、そのあたりに清八鍛治がいたというので地名を清八と呼んでいる。

重野半兵衛

北条の庄屋重野半兵衛は深沢の者で、情深い偉い人であった。天明のききんの時は自分の土地を売って米を求めて村人を救った。

ある時、半兵衛は伊勢の桑名まで用に行った。その戻り長野の宿の主人が「お前さん達越後の者だったら北条村の庄屋の半兵衛というお方を知りませんか、私は前の大ききんの時、その方からおかゆをいただいて命を救われた者ですが」とたずねた。半兵衛は「それは私です」と言おうとしたが、「それはよかったですね。私達はそんな人の名前も知りません。」といった。一しょだった組頭の人が「どうして本当のことを言わないで、あんなことを言ったのです」というと「こんな貧しい姿を見せたくないし、恩がましく思われるのもいやだから」といった。

この頃、北条で刀を二本差して歩けるのは半兵衛だけだった。半兵衛の子の三郎左衛門と言う人も出世して、北条二千石の大庄屋となって権力があった。

金倉さん

昔、金倉さんに天狗が住んでいたと伝えられている。東条の光安から八石尾根の西側に小さな祠がある。おそろしい天狗の面が、赤く高い鼻に、黒い髪を垂らして掲げられているのが金倉神社である。

天狗が急な坂を登る時、一本歯の下駄を用いたものか、大きな一本歯の下駄が沢山上げられている。裏山の壁のような急坂を登る時この下駄を用いると楽に登れる。

東条では、昔、日照りの時、この金倉さんにこもって雨乞いをした。村の人は道師を頼み、新しいたらいに清浄な水をたたえ、その中にあさそで作った龍を入れて、村中一戸一人ずつこの金倉さんに登り、七日七夜おこもりして祈禱した。昼夜二回道師と一しょに、「南無八大龍王、南無八大龍王、唵縛羅駄耶娑婆訶（おんばらだやそわか）」と祈願すると雨が降ったと言われる。

この神社を光安の金倉さんと呼んでいるが、その後その裏の山の頂きに、小広田の妙広寺さんが建立した祠を広田の金倉さんと呼んでいる。

その上の金倉さんと下の金倉さんの間は急坂になっていた。さざれ石なので参詣人の行き帰りに小石がざらざら　ざらざらと崩れ落ちるが、その夜のうちにさざれ石はもと通りになっているといわれ、天狗の仕業であると伝えられている。

境内に天狗の石（天狗が持って来た石）という石あり、祭日は、五月八日である。

片目の蛇

東条に現在、「小池」とか「池の端」と呼ばれる地名が残っている。その名は伝説の後でつけられたもので、以前はこの地一帯を「池の平」と呼んで大きな池があった。その池の中に青光りする皮膚を輝やかせた大きな蛇が住んでいた。それから何百年か後に大池と小池と二つの池ができて、大池には男の蛇、小池には女の蛇が住み夫婦仲のように親しくしていた。村人たちは、この池の主を田畑の守り神としてあがめたてまつり、その池の水を粗末にするようなことはなかった。

ある春のうららかな日、ひとりの修験者が街道を柏崎へと急いでいた。修験者は池の端で掘り飯をほおばると、まもなく、うたたねを始めた。どの位寝過したかわからないが、修験者は「ガサガサ」という物音に驚いて、ふと目をさますと「アッ」と悲鳴をあげた。

真黒い眼を輝かせ、口から赤い舌をペロペロと出した大蛇が、こちらへ立ち向って来るではないか。修験者は刀の鞘（さや）に手をかけるや否や、無我夢中で蛇の片目に剣を突き刺した。蛇は逃げて池にもぐり込み、修験者は命からがら逃げ去った。それからというものは両池の主の蛇は片目となり、その池に住んでいるどじょうもすべて片目となってしまった。

池の端にある熊野権現には蛇の神霊が祀ってある。その傍には片目の蛇を埋葬したといわれる小さな墓石が建っている。

白狐の乙姫

今から幾百年も前の話、旗引山の権現さんのあたりに乙姫という神様が住んでいた。どこから来た神様か、どんな姿なのか見た者はなかった。多分権現さんのお使いだろうと伝えられている。その乙姫は天眼力を持っていて、山の上から眺望できるところは、知らぬことはなく、どこで何を話しかけても直ぐ返答してくれた。

村に五兵エという百姓がいた。ある朝、釜に一杯たいた飯が一粒もなかった。「乙姫様これはどうしたのでしょう」と聞くと、「それは隣の五作が食ったのだ」と答えた。五作の家に行ってみるとその通りだった。

そのようなことから、山や畑に鋤や鍬など置いて来ても決してなくならなかったので、村で悪いことをする者がなかった。

ある年の秋、六蔵さんの畑が狸や兎に荒らされたのでわなをかけた。ところがその真夜中ころ、「六蔵助けてくれ」と叫び声がした。六蔵はびっくりして声のした方に行って見ると、白い大きな狐がわなにかかって死んでいた。乙姫さんにことわってわなをかけたのだが、わなのねずみのテンプラの香りが良いので手を出してしまったのだ。

六蔵は白い狐を旗引山にていねいに埋めた。それから、乙姫さんを呼んでも何の返事もなかった。

細越城

細越城は昔、細越という武士が築いたので細越城と呼んだもので、現在の北条中学校のあるあたりを細越と呼んでいるので、その付近が城跡だろうと言われている。

旧広田の「おおい」という現当主定直の先祖、小黒登之助は北条城の家老としてこの城主だった。そこから峰伝いに旗引山に通ずる道があって、その付近は皆小黒家の所領だった。館は今小黒家の屋敷であったか、そこから弓を射た「まとば」がある。

細越という武士はその後、上条の上杉さんに仕えて別俣に行ったので、そこにも細越という地名と城跡がある。

また、細越を含めた旧広田、および大広田を広田と呼ぶのは大井広栄という人が、亡父重広の供養に専称寺に寄進した広称院の田のあるところから「広田」と呼ばれるようになった。

首なし地蔵

首のない地蔵さんがあった。村の若い者が、それで力くらべをして遊んでいた。信心深い佐助じいさんが、台座の上にのせて立礼した。「地蔵さんをばんもちの道具にしてくれるな、罰があたる。」

それから村の若者は、首なし地蔵に寄りつかなくなった。それから三日程たってから、佐助じいさんは熱病にかかって、どうしても

直らないので、村の行者にみてもらったら、首なし地蔵の罰だとのこと、

「首なし地蔵は、せっかく村の若い者達と面白おかしく遊んでいるのに、立札などしたので若い人達が遊んでくれなくなった。それで首なし地蔵がひとりぼっちで寂しくなり罰をあてたんだ。」

佐助じいさんは、そのことを村の若い衆に話して、立札を取りはずし、村の若い衆に首なし地蔵と仲よく遊んでくれと頼んだ。若い衆は、また力くらべして遊んだ。すると、二、三日して佐助じいさんの熱病はすっかり直った。

ぎようんづか

大広田の裏山の頂きで今テレビの塔のあるところに、ぎょうんづかという塚がある。

昔、行者がいてそこで行をしたと伝えられている。その行者は佐渡の者で、そこからは日本海が眺められ、佐渡も見えるので、「おれが死んだら、ここに埋めてくれ」と言っていたので村の人が、その行者を葬った塚だと言われている。

ぎようん塚は「行塚」とか、「ごぼう塚」と呼ぶ人もある。

ごぼう塚は「御坊塚」の意味だという。

おまん茶屋峠

北条から塚山へ行く時、広田と袴沢（はかまさわ）の間に長い峠がある。広田から登って峰道を四Kmも行くと塚山が見える嶺に出る。その峰道を左手、北へ行くと今の小千谷県道に出る。右手の南へ行くと塚山の袴沢へ出るのである。その三角点の頂上に薬師塔や二十三夜塔が建っていて昔の街道を物語っている。そこの平地で今草藪になっている処に茶屋があって、おまん婆さんが旅人の接待をしていた。五、六百年位の樹齢を持った松が数本立っていたと言われるが、昭和三十四年ころ、その最後の一本も切られてしまった。この峠は明治三十年ころ塚山峠に県道が出来るまで、北条から塚山へ越す大切な小千谷街道だった。そのころ、その峠を越した人は今でも「おまん婆さん」を知っている。

おまん婆さんがきりょうよしだったか、また、悪いことをしたせいか、いずれにせよ、有名だったので、今でもこの峠を「おまん茶屋峠」と呼んでいる。

おまん茶屋から、しばらく広田の方へ下った所にお千茶屋というのがあったという所に、古井戸が今でも残っている。

三階節のおまんと、このおまんとはどういう関係か、あるいは、そのころ、女、娘のことをおまんと呼んでいたのではなかろうか。

西光寺跡

広田の島に西光寺跡がある。昔、大きなお寺があったのだが、住職が京都へ修業に行っているうちに、檀家がみな柏崎の聞光寺へ移ってしまった。住職は帰って来たが檀家がなくなったのでお寺はつぶれた。仏さんの掛軸は大角間の上の田島という家にあずけられた。

椎谷の殿さんから嫁に来た鼻田の「さじんの婆さん」の話である。

谷地いなば

谷地いなばのせがれは男振りも良いし、声良しだった。仕事で西谷通いをしていて、毎日十二ノ木から、ならなしの池の端を通って行く時、見晴しのよい山道なので朗々と追分を歌っていた。

ならなしの池の主の大蛇がこのせがれに一目ぼれした。美しい女に化けて、引地の谷地いなばへついて来た。家の者が不思議に思って、添い寝しているところをのぞき見したところ、天井裏に大蛇が七まわり半もどぐろを巻いていた。この蛇の化身だと気づき打ち殺した。そして、そのむくろを埋めたが尻尾の方が生きていて東の方のならなしへ帰ろうとあがくので、引地は長鳥川の方へ動く、地が引かれるので引地と呼ぶようになった。

入定法印

山本真珠院の裏山の頂きに数本の老松が何か由緒を物語っている。そこのお堂は秀快法印が入定した石室をおうているのである。

秀快法印は藤井の生れで九才の時出家させてくれと両親に願い真珠院に来て、秀侑上人の弟子となった。いろいろ修業して三十五才で住職となった。

法印は、外に対しては広く心の仙道につとめ、内には日夜、如来菩薩を信心して、念仏を一心に唱えていた。四十七才の時より誓願を立て、穀物を断ち、菜食のみとって十ケ年間禅を修めた。そして裏山にお堂を建てて弟子達に告げるには、「静かに聞いて下さい。私は金剛定に入定して、身はこの清き部屋にとどめ、仏の道を極めます。その時期は明年三月二十一日です。」

いよいよ入定の期日となって、弟子のみこしに乗って静かに浄室に入られた。二十一日間断食の行が続き、鈴の音が鳴っていた。二十一日目に村人が集った時は鈴の音がとまり、秀快上人は生き仏として入定されていった。六十二才だった。

あねんぼう

西長鳥の山本に仲の悪い嫁と姑がいた。嫁は家で楽々と昼寝ができないので、山の上の薬師塔のある所に行って昼寝をしていた。ある日、姑がそれを見つけて、「このあね（嫁）はマア、早く出て働いていると思ったら、こんなところで毎日昼寝していたのか」と逃げるあねを追いかけた。嫁が昼寝をしていた所を「横寝の薬師」、嫁が逃げて追いかけられたあたりを「あねんぼう」と、また、嫁がその後、こっそりかくれて昼寝をした所を「かくれや」と今でも呼んでいる。

また、「あねんぼう」については、旅の坊さんが娘を追ったので「あねんぼう」というのだとも伝えられている。

中村の大杉

中村、白山さんの境内に大杉がある。この大杉は藤原鎌足の末孫で時の庄屋だった佐藤政治さんの先祖が、旅から持ち帰り植えたものと伝えられている。

根本の囲りが三丈六尺（十一m）地上二間位（三、五m）の一の枝の太さが一丈二尺（三、五m）もあり、それより上の枝は太さ一丈（三m）から四尺（一、三m）五尺（一、六m）のものが七、八本もあって、一本の木で森をなしている。

この一の枝の下に乳房のような形をしたものがあって、そこから垂れる雫（しずく）を飲ませると乳児が丈夫になり、また乳の出ない人が信心すると効果があると言われ、乳神様として信者の信仰を集めている。

そして昔からこの大杉は国の大難事には経文を唱えるといわれてきたが、支那事変の起きた時も毎朝四時ころから三十分、一ヶ月位その声を聞いたという人が今も沢山いる。

また、この木の皮で虫歯をつっつくと痛みが取れるといって盛んに使われたこともある。

この杉の樹が千年の樹齢を保って今なお栄えているので、長命杉とも言われ、長命にあやかるよう参拝者も多い。戦争中このお守札を持って出征した人の生存帰還者が多かったとも言われている。

天長（てんなが）長者屋敷

仲村の「おくらばん」のおばあさんと、分家のおばあさんが同じ夢を見た。それは「とびがねの山に宝が埋まっている」という夢だった。気にもしないでいたがその後、おくら番の衆がそこの畑を耕していたら鍬にあたったものがあったので、掘ってみたら瓶が出た。ふたはこわれたがその瓶を持って来て、上水を流して洗ったら中は朱だった。長鳥川を流れた朱は鯖石川まで赤く染めたとのことである。

その瓶の出た所を昔から「天長長者屋敷」と呼んでいる。非常に勢力のあった長者さんで、「とびがね」から妙広山を下ったあたりの現在墓地になっているところを「にしのばば」と呼び、その下の「どばた」という家の裏の池は馬の蹄を浸した池だとのことである。

力満虚空蔵

野中の力満虚空蔵さんは、広田から長鳥に行く間の、おいざき、という沖の東側にあるとがった山の上にある。

昔から一臼餅をついて献げると、力が倍になると言われ、力持ちになるように信心した。

野中の作助という男が祈願の甲斐があって、非常に力持ちになった。ある日、大勢で引かねば動かぬだいもちを作助が引くと一人で

動いた。作助はすっかり嬉しくなり、そのだいもちの上に躍り上がって大はしゃぎした。ところが白い幣束（へいそく）がヒラヒラと見えたと思ったとたん、作助の力が抜けて、もとの作助になったとのことである。

このようにあらたかな神様なので、この山の下を馬に乗っては通れなかった。あらたか過ぎるので、また、罰があたると困るとて本尊さんを土の下に埋めたと言われ、今、山の上には何もない。

福満虚空蔵

竹の下（嶽の下）、東側山上に福満虚空蔵がまつられている。この仏は福を授けると言われる。一生懸命に祈願すると、桑の木株が目頭に浮かぶ、そうすると、朱千杯、金千杯の富が授かると伝えられている。

竹の下部落全体の祈願仏で、境内に六反余（六〇a余）の土地があり、部落共有の植林があるので、虚空蔵さんの維持費はそれでまかなわれている。

石の仏には、じんすけ、げんすけ、施任、正徳五年建立と刻まれている。

能満虚空蔵

昔、鎌倉建長寺七世、天庵存龍和尚がこの地へ流れ着いて、現在能満寺裏山の中腹の白山社のある処で座禅し修業した。ここ長鳥の地は三虚空蔵にふさわしい三山があるので　これをまつって庵を結んだ。これが能満寺御開山とされている。長鳥三虚空蔵の御本尊は能満寺さんにある仏さんだと言われている。この御本尊は、懸仏で、能満、福満、力満の三体を浮彫りした青銅である。

南無福満虚空蔵
南無能満虚空蔵　　と楷、行、草書体で天海さの書かれた軸がある。
南無力満虚空蔵

日本全国で、三虚空蔵の三山がそろってあるところは、会津の柳江津と、ここ長鳥の二ケ所だけだという。

長鳥三虚空蔵

1. 力満虚空蔵……西長鳥、山本字野中の七戸が虚空蔵講を作って管理している。
2. 福満虚空蔵……長鳥、竹の下二十戸が管理、毎年四月八日全戸が寄ってお祭をする。
3. 能満虚空蔵……東長鳥、杉の入能満寺裏山頂上

源助の大黒天

竹の下、源助の床の間脇に特設された仏壇の奥深く、まつられている大黒天がある。これは、富山城主佐々成正の守本尊だといわれている。佐々成正は、越中小山戸城主だった時、秀吉に亡ぼされ、九洲へ亡命中、謀叛を見破られ切腹した。その三人の男の子どもが

越後へ逃れた。長兄の源助がこの地に土着して伊部姓を名乗ったのがこの家の先祖だという。

父成正の遺品として三間半の大槍百足虫丸、八人だめの強弓、兜の中の守本尊の仏像、福満虚空蔵大菩薩が伝わっている。この仏像は鎌倉時代の仏師、運慶の彫刻で一寸八分（五、五㎝）の木像である。裏に、小坂運慶刀と刻まれている。

虚空蔵さんは丑、寅生まれの人の守り神だと言われ、岩の入、山本、山潤、広田方面に沢山の講中がある。

大黒天の兜の位星が異様に光っているが、お詣りをして、この位星の見えない人は不幸、災難があるとその例に沢山の物語がある。

鼻田の化け猫

鼻田に三匹のよた猫がいた。「かぜん」「さじん」「さんしろ」の猫だった。この三匹の猫は踊りが好きで、毎夜どこかで踊っていた。

ある日、「はんぜん」の爺さんが鳥谷城へかや採りに行った。山の上で三匹の猫が踊っているので、そうっと見ていた。ちょっと音を立てたら猫が聞きつけた。「お前、おらの踊りを見たな、人に話すとたたってやるぞ」と言われたので、村の人に話をしなかったが、ながながの病気でもうだめだという時に、家の者にこの話をした。猫はこれを聞いていて「ニャン」と鳴いたところ、爺さんはゴロゴロと、のどを鳴らして息を引き取った。

夜、干してある腰巻がなくなったと思ったら、この猫が取ってきて、かぶって踊っていたのだった。この腰巻は踊りのすんだ翌日は返されてあったとのことである。

河童あいす

鼻田の与七の裏から芝峠へ行く道があって、長鳥川を渡る橋があった。その橋下の川で宮下の爺さんが馬を洗っていた。馬がふんばって脚を上げないのでよく見たら、尻尾に河童がついていてはなれない。よしきたと爺さんはむりやりに馬を引張り上げて家へひいて来た。まだ河童がついているので、こっそりはんぞうを持って来て河童にかぶせ、とうとうつかまえた。

つかまった河童は「良い薬をやるから助けてくれ」というので、はなしてやったところ、猿のきものような薬をくれた。この薬は打身や切りきずに良くきくので有名になった。

馬の尻尾を巻いてしばるのは河童がつかないようにするためだという。

いわばな

鼻田に「いわばな」という家があった。もと、この家は岩之入に行く所にあった坂田館というお湯屋の場所で百年もお湯屋をしていた。

湯の花の家、おゆばなの家というので村では「いわばな」と呼ん

でいた。坂田館が普請する前まであった。左端のかやぶき屋根がその家である。

村の人にねたまれて、そのお湯屋に化け物が出るとうわさされてお湯屋ができなくなった。長い間空き家だったのをその後、よごやの家がまたお湯屋をはじめたのが坂田館である。

袖ケ窪

岩の入、八社宮から「うんどうね」という坂道を登って行くと頂上の草藪に米山検校の顕彰塔がある。その峰道を左に行く山一帯を米山と呼んでいる。そのあたりから右手に下るわかれ道に塚が二ケ所ある。そこを「袖ケ窪」と呼んでいる。

袖ケ窪は鳥谷城のかくしとりでの跡だと言われている。袖ケ窪から下ったあたりを「サニウドウ」という。孫四郎池もその下にある。米山の西側が経塚山で、その下が「おかねさん入」という。そこは長鳥駅の前の沢である。

「うどんうね」は雲上峰か雲堂根か。

「さにうどう」は沙弥堂か、

など、読み替えてみると「おかねさん」「経塚」などの地名とからみ合せて、山上にお堂があったようである。

じゆうえん猫

魚沼上田は漆かきの本場である。長鳥方面も上田の漆かきが来ていた。

ある年、上田の漆かきが上田で漆かきをしていたら、いい声で義太夫を語っている者がある。行って見ると大きな猫が木株の上で、小猫をたくさん集めて義太夫を語っていた。大猫にどこから来たと聞いたら、長鳥の「じゅうえん」だと言った。その漆かきが長鳥へ来た時、岩の入の重右衛門に行って聞いてみたら大きな猫がいた。重右衛門の者はこの猫が上田あたりまで行ってそんなことをしていたのだろうかと驚いたが、大猫は知らぬ顔をしていた。

弘法大師の塩水井戸

今から千年余り前、寒い秋の夕暮れ、一人の旅僧が岩の入へやって来た。みすぼらしい姿をしているので、だれも泊めてくれなかった。村はずれにふと明りが見えたので、旅僧はそこへ行って無理に頼んだ。そこの家は障子は破れ、壁は落ちたあばら家だった。お婆さんが出て来て、「せっかくだが何もないので」と言ってみたが、寒いのに疲れ切った旅僧を見て泊めることにした。お婆さんは夕飯に小豆粥をしてくれたが塩味がついてなかった。お婆さんは貧乏しているので塩を買えないのだと言った。そして隣へ行って借りようとしたが貸してくれなかったと話した。

翌朝、旅の僧はいとまごいをする門口で、お婆さんの親切が非常にうれしかったので、「私の力で塩を授けてやろう」と言ってお経を読みながら杖を高く振りあげたとみるや、地面に深く突き刺した。すると大きな穴があいて清水が湧き出た。それが塩水だったので、

お婆さんは気狂いのようになって喜んだ。しばらくして気がついてみると旅の僧の姿はなかった。みすぼらしい旅僧は実は弘法大師だった。それから村では弘法さんの塩井戸と呼んでいる。

村中の如来さん

昔、八石峠の程平の庄左ェ門という家で火災にあった。家財道具をみんな焼いたので他の家で寝ていたところ、夢知らせで「私は家の如来さんだが、火災の時、独りで出て前の柿の木に避難している」と告げた。朝早く起きて見たら柿の木の枝にかけられていて無事だった。

その後また、夢知らせで「私は岩の入の安兵ェへ行きたいから送ってくれ」と三度も同じ夢を見た。それではと、如来様を背負うて北条の泉あたりまで来ると、偶然話かけた人が、岩の入の安兵ェだった。安兵ェも同じ夢を三度も見たので、不思議に思って峠へ行って見ようと、出て来たのだとのことだった。それではとそこで如来様の受け渡しをしたとのこと。

庄左ェ門は安兵ェを、安兵ェは庄左ェ門を全然知らなかった。その如来さんは、今も岩の入の村中（むらなか－家号）の家に保存されている。懸軸の如来様である。

鳥谷城

鳥谷城は長鳥駅北側の山嶺である。山本判官重頼が築いたものといわれる。

戦国時代には越後で栄えた新田から高へ、高から上杉とかわるごとに城主も交代し、南北朝期の悲哀を象徴している山城だという。

西寄りの山中に、のろし台、馬の足洗池などがある。馬の足洗池跡は石畳になっていて井戸が三ケ所ある。杉の入のお寺の方から登ったものらしい。

長尾に仕えた白井長昌がこの城にいて北条城の番城の役をしていた。北条城が亡びて白井長昌は越後町の墓間に行ったという。

牧家の白藤

東長鳥、平沢の一軒島という処に住む牧家は、赤田城落城の時、落ちのびた三人兄弟の一人だと言われている。牧家の前庭に茂っている白藤の古木がある。それは三人兄弟が証拠にと分け合って持って来たものだという。

一人は岩塚、十楽寺の檀家で、そこにも大きな白藤が茂っている。いま一人は蒲原へ行ったと言うけれども、当主はわからないとのことである。

平沢の八幡田

東長鳥、平沢の沖田を八幡田という。その沖田の一角に、ここが宮跡だという田がある。

昔、ここに八幡さんが祀られていたが、村にたたりでもしたか、村の者はこの八幡さんの御神体を長鳥川に捨ててしまった。その御神体が流れ着いたのが十日市である。拾い上げられた神様を祀ったのが、北条創草の宮とされている石井神社と言われている。

そのため、八幡さんのお祭りには平沢の人達が来たと言われ、また平沢の人達が来なければお祭りは出来なかったと言伝えられている。

宮跡、八幡田も近年の耕地整理で田形はなくなった。

平沢の人は、北条の八幡さんは男神で、平沢の八幡さんは女神なので北条の八幡さんに嫁入りしたのだと言っている。

（注）　八幡田は八幡社の宮田で、宮跡は能満寺裏側の道下の川端にあるという人もある。

米山検校

米山検校は平沢の山上徳左ェ門の十一番目の子である。徳左ェ門は元、大角間にいたが妻が八人の子を置いて死んだので、平沢へ来て「さくえん」という家から後家をもらった。その三番目の子だった。兄弟が大ぜいあったのに検校は盲でその上きかんぼうなのでとうとう勘当された。女親の妹が二人も魚沼の塩沢に縁づいていたので、そこへたよって行った。おば達は家へ帰るようにいさめたが、江戸へ出る決心を変えないので、旅費をあずけて出した。

江戸へ出た検校は、ある日、道の真中でごろ寝していたところ、殿様の行列が来た。先払いの武士がどけと言っても天下の往来だと頑張って動かないので切ろうとしたが殿様が面白い男だと、いろいろ事情を聞いて召しかかえることにした。その殿様は水戸さんだった。

検校は一生けんめい勉強して日本で最初の検校の位をもらった。また、お金をたくさん貯めて、越後のききんの時、村人を助けた。岩の入の山にも、大角間の山にも村人が感謝した記念の塔が建っている。

娘が旗本男谷に縁づいたので、江戸では男谷検校とも呼んでいる。男の子平蔵が勝家に入婿したがその何代目かが明治の偉人勝海舟である。

しょうのいり

杉の入小林さんの裏の沢を「しょうのいり」と呼んでいる。鳥谷城の殿様の陣貝が埋まっている。それで今でも風が吹くと箏の音がすると言われている。

ふじづか

杉の入の墓地にある山の頂上に「ふじづか」と呼ぶ塚がある。鳥谷城と向い合っている峰で、芝峠から赤田方面へも行けるところなので、鳥谷城に関係のある要地のようでもある。

隣山が陣平という城跡で、その下に薬師堂がある。その薬師堂の

境内に富士講の塔があるので、「ふじづか」は富士塚かと思われるが知った人はいない。

田中の大尽

東長鳥の杉の入から平沢側へ移る長鳥川の橋のたもとに「田中の大尽」という長者が住んでいた。その橋のあたりは深い淵になっていて、かっぱが住んでいると言われた。

平沢部落を登りつめた峠部落に尼寺があって、そこに姉妹の美しい尼さんがいた。ある日、二人の尼さんが托鉢の戻りにこの橋の下の淵で、足の泥を洗っていたところ、妹の方の尼さんが、かっぱに足を引き込まれて死んでしまった。姉の尼さんは大変悲しんで、その淵に身を投げて死んだ。

それから、田中の大尽が運が悪くなって、とうとうそこにおられなくなり、奥の沢へ移った。

今でも、田中の大尽跡だという田甫も、奥の沢の田中屋敷という処も地名となって残っている。

長鳥川の淵の、かっぱというのは田中大尽のことだと言われている。

白井長昌

昔、長鳥の夏渡に白井弥六郎という者がいた。その娘が京都に出て、三好の妾のところで女中をしていた。そのうち三好の殿様の子をみごもった。夏渡へ帰る時、女の子が生れたらそれぎり、男の子だったら名乗って出るようにと一振の刀をもらって来た。生れた子は男だった。その子が八才の時、弥六郎は京都の父、三好を尋ねて行った。殿様は既に死んでいた。三好家では母が貧しい百姓の子だったので取り合わなかった。その後十三才の時また尋ねて行った。その時、三好家は四国に移っていた。親子は四国まで尋ねて行って止まること三年、修業して一かどの武士となって帰った。白井八郎左エ門と名乗って長尾為景に仕え、杉の居のとりで鳥谷城を守っていた。越後騒動で八郎左エ門は岩田に移った。これが岩田の白井忍家の先祖、白井八郎左エ門長昌である。

杉の居鳥谷城の表門は杉の入能満寺脇から登る。守っていた八郎左エ門は、長昌という。能満寺は長昌山というので、岩田の白井家の先祖長昌が開祖のようにも言われる。

しかし、能満寺は撥草開山：鎌倉建長寺七世、天庵存龍、御開山：善根浄広寺四世仙庵存鶴大和尚となっていて、開山、開基である。

梨断ちの木

能満寺裏山に、能満寺撥草御開山存龍和尚が禅業をしたという白山社は、虫歯の神さんとして祈願者が多い。祈願する時に梨を断って祈願する。あらたかな御加護を得た時は、梨の木を献じたといわれる。いつのころか、祈願成就して植えたものらしい梨の古木が一本残っている。

観音開き

東長鳥、大角間の重太郎という家に立派な観音様がある。村の人がお参りに行って、戸を閉めようとすると、そこの家の者は「観音さんは戸を閉めることがきらいだから開けておいてくれ」と言っていつも開きぱなしである。

それで、観音さんの前は、一本の戸も置かないで、全部開け切る仕掛けを観音開きということなのだろうかと村の人は言っている。

手沢塚

東長鳥、大角間の入り口に「手沢塚」と彫られた立派な碑がある。これは米山検校の弟子が建てたと言われている。

筆塚だと習字の先生の筆を埋めたものだろうし、手沢塚は先生の身近に使われた、いろいろのものを埋めたものらしい。

大角間の仲屋敷という家の先祖は、米山検校の直弟子だという。仲屋敷の弟子だった人が米山検校の身まわり品を埋めた塚らしい。

あんだろずんね

大角間の「きちえんどん」の屋敷は広くて前に三六の蔵がある。その裏山の下に「えんきょや」という家があって、そこの屋敷も広くて山側に大きな蔵がある。

「きちえんどん」のお爺さんはお人好しで人が来れば呼び込んで酒を飲ませたり、飲んだりしていた。

「きちえんどん」の蔵の脇上に祠があって「たかてらさん」の跡だという。「えんきょや」の蔵の脇に百年ほど前まで、あみだ堂があったという。

その「きちえんどん」と、「えんきょや」の間の山を「あんだろずんね」と呼んでいる。

小島の極楽寺は一時、大角間へ移って百年もいたという。その極楽寺を「阿弥陀山極楽寺」という。また極楽寺の秘仏に、「たかてら権現」がある。

大角間に移住した時の極楽寺は「きちえんどん」か「えんきょや」のどちらかにあったものか。

「あんだろずんね」は阿弥陀さんの峰ということだかと言われている。

五輪さん

大角間、前という家の裏に五輪さんという古い墓がある。それは、鳥谷城に強力の女の殿様があった。その人の墓だともいうし、前から分家した前田の先祖の墓だともいわれている。この墓は、ほうきょうえん塔である。

もと、家持というのは家があっても、カマドを立てられず、小屋同然にみなされたもので、分家というとカマドも立てられ、一人前

の家だとのことである。

孫四郎池

十二の木へ向う大角間のはずれに「にごり」と名づけた田甫地帯があり、その上方に「蛇越え」という山がある。この「濁」という山端に孫四郎が母と住んでいた。二人で田畑へ出るときまって孫四郎は「かあちゃん、水をくれよう」と水を求めた。母が水をくんでくると、孫四郎は必ず「こんな濁った水なんか飲まれないや」と母を困らせた。

いつとはなしに水を捨てたところは、濁った池となった。そして亡くなった孫四郎は、池の主となり「孫四郎池」と呼ばれるようになった。

蛇となった孫四郎は、山を越えて「ならなしの池」に移った。それからその山を蛇越えの山と呼ぶようになった。

現在、孫四郎池は、くぼ地に草が生えて、雨水がたまるくらいだが、「ならなしの池」は約百坪（三a）で、どんな日照りの時でも水がかれることなく、満々と水をたたえている。日照りが続くと、農家が総出で雨乞いをすると必ず雨が降ると言伝えられている。

陣平

長鳥峠を陣平という。西側の山の上に陣平という城跡があるからである。この陣平は今は二十軒位の住家があるだけであるが、昔、三百軒もあった時代もあった。

北条郷から、三島、刈羽方面へ出る宿場だったという。下の吉井黒川に「女郎が谷」という地名もあって、女郎宿もあったと伝えられている。

夏渡の天狗松

夏渡に天狗松という松がある。

いたずら天狗が、山をあらしたり、田畑をながしたりしたので、神様がこらしめて松になさったのだという。

時々松の繁みの間から、天狗の目玉が二つのぞいてらんらんと光ることがあるといい、天狗松の根方に風穴が二つあって、鼻いきがするそうだ。しかも天狗のきげんの悪い時は、鼻いきが大きくひびき、鼻いきが小さい時は、天狗がきげんのよい時だという。

昔、旅のやしが、この松の下を通った時、とって食われたといい、土地の人が子どもを叱るときには、

「だまらんと、天狗松の天狗さんにくれてやるぞ」

という。

長鳥長者屋敷

夏渡の諏訪神社裏と鷹の巣から大角間へ越す風野に長者屋敷と呼ぶ所がある。

その夏渡の長者屋敷から、鷹の巣へかけて百塚が点在している。百塚が鷹の巣で尽きるあたりから、風野に出る山中に「らんあな」と呼び、直径十m位のすりばち型の穴がある。そこから風野の峰伝いに大角間の方に百mも行った処に鷹の巣長者屋敷と呼ぶ平地がある。その下に「かくれ田」という沢があって、何か昔の夢を秘めている。いずれも人里はなれた山中のこと、その場所を知っている村人さえ少ない。

鷹の巣長者屋敷からは、土台石、石斧も出ている。鷹が住んだというこの山中も、長鳥から大積や、三島へ通う往来筋だった。平沢の一の口から登ってここに出るあたり数百年を経た天狗松があったが最近切られてしまった。ただ頂きには往時をしのぶ薬師塔や、二十三夜塔が道端の藪の中に残っている。そして北に弥彦山、西に米山が美しく見える。

平沢倉のがらん跡

鷹の巣から大角間へ越す風穴（かざな）という峠の下方に、夏渡の見える見晴らしの良い田場所がある。これは能満寺のがらんの跡だといわれ、能満寺の田だった。今は人里からはなれたこの山奥にどうしてお寺があったかと思われるが、この風穴峠が平沢の一の口から三島や中通へ越す大事な道だったらしい。その道中に不動尊がある。その下に年中清水が湧き出ている穴があって、夏渡へ出る長島川の源になっている。

その不動尊の立っている手前の林がうす暗く茂っているあたりに化けいたちが出て、通る人をこわがらせた。杉の入のよそきの父さんが一杯きげんで通ると大入道が出た。このいたちめと切りつけたら大入道は消えた。翌朝、家の者に話してそこへやって来てみたら、ズンボいたちは胴切りにされて死んでいた。

天狗松

タカノスから大角間へ越す風穴という峠に数百年たった松があった。一本だけ珍らしい風格をした老松で村の者は天狗松と呼んでいた。頂きが天狗の鼻のように突き出ているので天狗松と呼んでいたが、一名「人助け松」とも呼んでいた。村人は夜、この道を通る時、時々狼におそわれた。その時、この松のてっぺんに逃げて上っていると、狼は六匹も七匹も重なり合っておそったが、今少しというところでくずれ落ちる。何度もくり返しているうちに夜が明けてくるので狼は退散して、人が助かった。このようなことが度々あった。

十年ほど前に風で倒されたので切られてしまった。

般若田

鷹の巣、彦左エ門のおばあさんは信心家で、ぼだい寺の能満寺へ般若経六十巻を寄進した。この大般若に金がかかるので檀中の者が金を出し合って「いもんら」の田をお寺へ寄進した。それを「はんにゃでん」と呼んでいる。

彦左エ門の家はその後、広田の駅前に移った。

鷹の巣地蔵（一）

鷹の巣に一羽の鷹がいた。村で一番高い杉の木に住んでいた。この鷹は村の鯉や鶏、また、牛や馬までさらった。

村の人は困って、隣村の久七少年にたのんだ。すばしこくて、とんちのよい久七少年は承知した。久七少年は雀の鳴きまねをして、七羽の雀をとった。そして「ホーホー」と鷹を呼んだ。鷹は紫の雲の中から姿をあらわした。少年は雀を地上にばらまくと、鷹は降りて来て雀を食べた。幾日も同じことをくりかえしているうちに鷹はなれて、したしく降れるようになった。

ある日、一羽の雀に毒を入れておいた。それを食べた鷹は、いったん空へ飛び上ったが、もんどりうって落ちて死んだ。

その後、村中に赤痢がはやった。坊さんにみてもらったら、鷹のたたりだと言ったので、鷹を埋めた処に地蔵さんをたてた。

久七少年は夢を見た。一老人が「わしは殺された鷹だ。わしは地蔵さんを建ててもらってうれしい。これから村を守る。地蔵のそばを掘ると清水が湧く、これを病人に飲ませると病気が直る」と告げた。久七少年は村人に知らせた。そのとおり冷めたい水が出た。その水を飲ませると病気も直った。名主がこれは村の守り仏だと、鷹の巣地蔵尊と書いた旗をたてた。

鷹の巣地蔵（二）及びどうしようば坂

鷹の巣地蔵について鷹の巣の五十嵐善吉さんに聞くと、高鳥から深い沢を通って鷹の巣側の頂きに着いたあたりの善吉さんの山に地蔵さんがあるのがそれだろうと言われる。

昔、鷹の巣にたくさん鷹が住んでいて、近在の家畜を荒すので、鷹の巣の庄屋と高鳥の庄屋が相談した結果、代官所へ訴え出て、鷹をとってもらうことにした。そしてたくさん鷹をとったので、それからは家畜を荒す鷹がなくなった。その鷹の供養に地蔵さんが建てられたと言われている。

また、その時高鳥から鷹の巣村に来る沢が深く、鷹の巣側の坂道を登りながら疲れ切ったお代官が「さて、この鷹征伐も、どうせばのお、」と言われたので、今でもその坂を「どうしようば坂」と呼んでいるとのことである。

北条を縦貫する小国二和線道路もこの「どうしょうば坂」を越さねば高鳥に出られないので、夢の架け橋のような陸橋を架ける計画だという。

鷹の巣観音

鷹の巣の観音さんは非常にご利益あらたかな観音さんである。

昔、桝形城の殿様が赤田城へ行く時、この観音さんの前を馬に乗って通れなかった。馬に乗って通ると必ずたたって落ちるか、けがをするからである。それで殿様がそんなあらたかな観音さんは物騒だからと堂の前に埋めさせた。椿の株の下であると言伝えられている。

小さな観音堂は現在祀られている仏像は、土に埋められた仏像の代品であるとのことである。

（注）　この観音屋敷と観音堂は、五十嵐孫左ェ門の所有。

タカノス百庚申

鷹の巣観音屋敷に沢山の庚申塔が建ててある。この部落の隆盛だったころ、庚申講の信心深い講員があって、見晴らしのよい観音屋敷に庚申塔を百基建てることを発願して、見事成就したものである。発願成就の祝には、この山村に珍らしい花火が上げられたとのこと。今、村の鎮守さん六社宮の縁の下にある花火筒がその時使ったものである。

観音屋敷のまわりの崖は深くて、石を落すとゴロゴロうなりをたてて落ちるので、百庚塔も若い衆の力くらべの犠牲になって谷に投げ込まれ、二、三しか残っていなかったが、支那事変で戦死した政吉さんが青年会長の時、有志の力を借りて下の谷を探してかつぎ上げたので今は十六、七基建っている。

おえん沢

鷹の巣から高鳥へ越すところに、「おえん沢」という沢がある。昔、狼がたくさん住んでいた沢だという。

ある晩、鷹の巣の者が、がんぎで子どもに小便をさせていて狼にさらわれた。鷹の巣の者は怒って、この狼を退治した。高鳥の大欅の下にその狼は埋められたと言伝えられている。